

聞く力の育成による人間関係形成力の向上

－トーク活動の実践－

川太 雅尚
教育実践高度化専攻
児童生徒支援コース

1 研究の目的

近年、子どもの人間関係形成の困難さが課題として指摘されており、学校現場では人間関係形成力を育む試みが行われている。本研究では、「聞き方」に関する指導を行い、そのうえでトーク活動を実施した。「子どもの聞く力を育むことで、人間関係形成力が向上し、学級での居心地をよくすることができる」という仮説を立てて実践研究を行った。

2 基本的な考え方

(1) コミュニケーション能力について

筆者はコミュニケーション能力について、「話す力」と「聞く力」で構成されており、それぞれいくつかの要素を内包しているものであると捉えている。そのうえで、聞くことが児童相互間の安心感を育み人間関係を円滑にする要素であると考え、本研究において「聞く力」に焦点を当てて実践を行った。

(2) 聞く力について

筆者は聞く力について、身体的活動と心的過程を含んでいるものであると考えた上で、①内容理解の力②非言語面の伝達③多様性の承認の3つの要素から構成されると捉えた。

(3) 本研究の考え方

本実践では、対象児童である小学2年生の発達特性を考慮し、非言語面の伝達、つまり話を聞く際の外面の部分について指導を行うことで聞く力の向上を図った。

3 実践内容

(1) 対象

茨城県内の公立X小学校2年Y組16名（男子11名、女子5名）

(2) 調査時期

前期実習：2022年5月30日～2022年6月17日（5月30日に1回目の質問紙調査）

後期実習：2022年9月5日～2022年9月16日（9月15日に2回目の質問紙調査）

(3) 手立て

1) トーク活動の実践

基本的に週3日、朝の時間15分を活用し、前期8回、後期6回の計14回行った。本研究の中心的活動であり、児童同士が直接コミュニケーションを取る機会を設定すること、聞き方の般化を促すことで聞く力を高めることが目的である。活動は溝越（2018）を参考に取り入れ、全員で行うクイズ型の活動と、決められたお題（ぼく/わたしのたからもの等）について話をするペア活動を行った。

2) 上手な聞き方に関する講義

前期の一週目に、授業時間を使って聞き方に関する講義を行った。「友だちと関わる場面において、相

手が話しやすいよう、真剣に聞いていることが伝わる聞き方を身につける」ことをねらいとし、翌週以降のペアでのトーク活動で般化を図れるようにするための準備として行った。教師のロールプレイ（バッドモデル）をもとに上手な聞き方を考え、実際に自分たちで練習する活動を展開した。

（4）質問紙の構成

「学級の居心地のよさアンケート」「聞き方アンケート」の二種類をそれぞれ4件法で作成し、前後期実習前後の2回実施することで効果測定を行った。それに加え、トーク活動の取り組みの様子を見ることを目的に「振り返りカード」を各活動後に行った。

4 結果と考察

（1）質問紙の結果

実習前後の「学級の居心地のよさ」「聞き方」に関するアンケートそれぞれを対応のあるt検定（片側検定）にかけた結果、それぞれ平均値の有意な変化は見られなかった。そのため、「聞く力を育むことで人間関係形成力が向上し、学級の居心地のよさが向上する」という結果は確認できなかった。

（2）学級の居心地のよさと聞き方に関する考察

結果に関する考察の一つとして、聞き方に関する理解の難しさが挙げられる。トーク活動の様子や振り返りカード、アンケートを見比べると、児童にとって「あいづち」や「うなずき」といった項目は習得に苦勞する様子が見られた。児童にとってこれらが大事なこと、必要なものとは理解できていても、では自分がどのように行えばよいのか（特にタイミングや頻度）についてはなかなか落とし込めないようだった。この他の要因として、天井効果や聞き方に関する講義の頻度なども考えられる。

（3）振り返りカードに関する自由記述の結果と考察

トーク活動後の振り返りカードからは、聞き方について児童が聞き方について意識した様子や、コミュニケーション自体を楽しんで行った様子が見てとれた。

5 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

研究成果として、質問紙上では有意な結果が出なかったものの、振り返りカードや実際のトーク活動の様子からは、回を重ねるごとに聞き方を意識しながら友人との会話を楽しむ様子が見られた。長期的なスパンでのトーク活動の実践や、定期的に聞き方について意識を促す機会の設定によって聞く力を向上させる有効な方法になるのではないかと考える。また、居心地のよさに関しても、さえずらずに相手の主張を待つ場面が見られるようになった。このような関わりが学級内で増えることで、より居心地のよい学級になっていくのではないかと考える。

（2）今後の課題

課題として、話すことが苦手な児童への支援や児童の意欲を考慮した取り組みの実践、児童が自身の聞き方についての変化を認識する機会の設定などが挙げられる。児童同士の自然な会話を意識し、一人一人がコミュニケーションを楽しめるようにすることで、人間関係形成の上で重要なコミュニケーションのハードルを下げる一助となるよう、実践を続けていきたい。

6 主な引用文献

溝越勇太(2018). 1日5分 小学校 全員が話したくなる！聞きたくなる！トークトレーニング 60